

**SHOW HEY**シネマルーム

★★★★★

**ウィンストン・チャーチル  
ヒトラーから世界を救った男**

2017年/イギリス映画  
配給：ピタース・エンド、パルコ/125分

2018(平成30)年3月31日鑑賞 TOHOシネマズ西宮OS

**Data**

監督：ジョー・ライト  
原作：アンソニー・マッカーテン『ウ  
ィンストン・チャーチル ヒ  
トラーから世界を救った男』  
(角川文庫)

出演：ゲイリー・オールドマン/ク  
リスティン・スコット・トー  
マス/リリー・ジェームズ/  
スティーブン・ディレイン/  
ロナルド・ピックアップ/ペ  
ン・メンデルゾーン

**👁️👁️ みどころ**

メリル・ストリープは『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』(11年)で第84回アカデミー賞主演女優賞を受賞したが、第90回アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞した辻一弘氏の助力もあって(?)ゲイリー・オールドマンは同主演男優賞をゲット!

たしかに、ナチスドイツの攻勢が強まる中、宥和政策を排して徹底抗戦を貫いたチャーチルの頑固力(?)と、ラストに見る演説の巧みさは光っている。しかし、今ドキなぜチャーチルなの?

トランプ大統領の登場以降、北朝鮮政策を中心に、融和策?それとも強硬策?の議論が強まっているが、本作はその参考になるの・・・?

本作は、ヒトラーの12日間VSチャーチルに27日間という視点からも、しっかり検討したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

**■□今ドキなぜチャーチルが映画に?彼が果たした役割は?■□**

昨年12月9日に観た『否定と肯定』(16年)は、「ホロコーストはなかった」と主張するイギリス人の学者から、それを批判したユダヤ人の女性が名誉棄損で訴えられた、「アーヴィング・リップシュタット事件」を描いた傑作だった。このようにドイツでは、ホロコーストもの、アウシュビッツもの名作は多いし、ヒトラーもの名作も途切れることがない。しかし、今頃どうしてチャーチルの映画が登場したの・・・?本作は日本人の辻一弘氏が第90回アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞したことが大きな話題となり、チャーチル役を演じて第90回アカデミー賞主演男優賞を受賞したゲイ

リー・オールドマンも大きな名誉を得たが、はっきり言ってチャーチルが歴史上果たした役割って一体ナニ・・・？

ナチスドイツが1940年5月に始めたフランスへの侵攻によって、フランスはあっけなく敗北した。そして、一方でロンドンにドゴール率いる「自由フランス」の亡命政権を誕生し、他方でフランス中部の町ヴィシーにヴィシー政権がナチスドイツの傀儡政権として誕生した。そんな状況下、イギリスではチェンバレン内閣の弱腰外交が批判される中、突然、保守派・強硬派の雄であったチャーチルがイギリスの戦時内閣を担うことに。彼はとことんナチスドイツに抵抗することを国民に宣言したが、さてそのことの意味は？功罪は？

日本だって、対英米戦争を始めた東条英機内閣をはじめ、歴代戦時内閣は国民に対して最後まで抵抗を訴え、本土決戦、1億総玉砕まで叫んだが、その結果は・・・？たまたまイギリスはチャーチルの頑張りによって結果オーライになったから、チャーチルは英雄とされているだけではないの？私はそんな疑問を持ちつつ、本作の鑑賞に臨むことに・・・。

## ■□■平和には宥和策？それとも強硬策？現在と対比すれば？■□■

今日までずっと北朝鮮情勢は中東情勢と並ぶ「世界の火薬庫」だったが、世界平和のためには強硬策より宥和策の方がベター？ブッシュ・ジュニアを例外として、アメリカのオバマ大統領をはじめとする歴代大統領はそう考えてきたが、トランプ大統領の登場によってその考え方は一変した。北朝鮮に対する経済制裁の強化をはじめ、軍事オプションをも排除しないとするトランプ戦略の是非は、本作を鑑賞するについての参考としたい。

本作はそれまでナチスドイツに対して宥和政策をとってきたチェンバレン内閣が国民の支持を失い、辞任を余儀なくされるどころからスタートする。ちなみに、月刊誌『Wedge』4月号で本作を評論している瀬戸川宗太氏は①「ヒットラーのヨーロッパ支配を許した根本的な原因が、チェンバレンらがドイツの要求に屈した38年のミュンヘン会談にあることはよく知られている。」②「同会談によってもたらされた一時的な平和が、世界大戦の引き金を引いたことの教訓を踏まえ、戦後、ミュンヘンの地名は宥和主義の犯罪性を示す代名詞となった。」とまとめているが、私はこれに同感だ。また、同氏はチャーチルが「全体主義と徹底的に戦った保守政治家。第二次世界大戦の英雄である。」として、その歴史的に果たした役割を強調するとともに、戦後は「鉄のカーテン」演説で、東西冷戦のきっかけをつくるわけだから、彼の全体主義との対決姿勢は終始一貫している。」と評価している。その上で、最後には、「現在、北朝鮮の挑発行為に対して「戦争を避け平和を」といった主張が叫ばれているが、再び世界を独裁権力の支配と破滅へ導く新たな宥和主義の危険性を認識することが重要だ。戦争の危機が迫る今、全体主義と不屈に戦ったチャーチルの実像が映画化された意義は極めて大きい。」とまとめている。私はこの論旨にも大賛成だが、さてあなたは・・・？

森友学園問題等で、安倍内閣への支持が急下降している中、そしてまた、トランプ大統領の側近が次々に首を切られている中、北朝鮮の金正恩委員長が韓国のK-POPを観劇するという歴史的な大転換がはじまっている中、やっぱり宥和政策が正しいの？それとも・・・？

## ■Hitラーの12日間VSチャーチルの27日間■

『Hitラー～最後の12日間～』（04年）は、Hitラーが総統官邸地下要塞にこもった1945年4月20日から4月30日にHitラーが自殺するまでの「最後の12日間」を描く名作だった（『シネマールーム8』292頁参照）。それに対して本作は、チェンバレン内閣に対する不信任決議が出された1940年5月9日から、チャーチルが首相に就任し、5月28日に下院で歴史に残る名演説を行い、「ダンケルクの戦い」に至るまでの27日間を描く映画だ。

そのため、『Hitラー～最後の12日間～』では愛人エヴァとの暮らしぶりや、自殺直前の4月29日に挙げた質素な形ばかりの結婚式の様子など女性関係を含むHitラーの全人格が否応なく炙り出されていたが、それは本作も同じ。そのため、本作ではチャーチルがその美貌に一目惚れして結婚したという11歳年下の妻クレメンティーン（クリスティン・スコット・トーマス）との微妙な夫婦関係（？）を含めて、チャーチルの全人格が否応なく炙り出されてくるので、それに注目！さあチャーチルの人物像は？こんな頑固なおっさん、あなたは好き？それとも・・・？さらに、彼はHitラーに対して具体的に、どのように対抗したの？彼の軍事・外交面での真の功績は一体ナニ？それらをじっくり確認したい。

ちなみに、『Hitラー～最後の12日間～』については、反対論として「殺人鬼の人間性を振り返るなど、どこにあるのだろうか」（ターゲットシュピーゲル紙）、「ドイツはユダヤ人大虐殺の歴史を取り繕い美化している」（エルサレムポスト紙）等の反対論が噴出し、賛否両論が展開されたが、さて本作は？前述した『Wedge』の評論を読めば、本作に対する反対論はあまりないようだが、それってホントはあまりよくないのでは・・・？

## ■二人の政敵は？その扱いは？役割は？■

保守派の政治家で度重なる失策から「政界一の嫌われ者」といわれていたチャーチルは、チェンバレン内閣で海軍大臣に就任していたが、ナチスの抬頭の前にイギリスの海軍力はなす術もないまま、1939年9月1日、Hitラーのポーランドへの快進撃が始まった。すると、Hitラーのフランスへの侵攻はいつ？さらに、ひょっとしてイギリスへも・・・？イギリス政府としてはそう考え、対抗策を講じるべきが当然だが、当時のチェンバレン内閣の対応は？

不信任案決議を受けてチェンバレン首相が辞任した後、なぜチャーチルが次期首相にな

ったの？それは、対英米戦争開戦前夜の日本における首相選びと対比して考える必要があるが、かなりいい加減なもの。要するに、弱腰のチェンバレンより、強硬派のチャーチルの方がいいだろうという、わかったようでわけのわからない“民意”によるものだ。2001年4月の自民党総裁選挙で、「自民党をぶっ壊す」をキャッチフレーズとし、政敵の排除を公言して立候補し、総理大臣に就任した小泉純一郎とは異なり、この時のチャーチルは対独有和派のチェンバレンも、それに同調する外務大臣であったハリファックスも打倒するとは言っていなかったため、彼らも新内閣の一員に取り込まざるを得なかった。そのため、戦時の「挙国一致内閣」とは名ばかりで、その実態は最初から妥協せざるを得ない人員構成だったわけだ。

本作中盤では、そんな実態の中で閣内調整に気をとられ、思うような指導力を発揮できないチャーチルのイライラ状態が目立っている。そのためチャーチルの酒の量は進んでいたようだが、それをうまくコントロールしているのが愛妻のクレメンティーン。また、国王ジョージ6世（ベン・メンデルソン）は「なぜハリファックスではなく、チャーチルなんだ？」と当初はチャーチルの首相起用を疑問視していたが、毎週の恒例となった2人だけのランチタイムの中で互いの信頼関係が強化されたのはグッド。更に、タイピストとして雇用されたエリザベス・レイトン（リリー・ジェームズ）も当初はボロクソに怒鳴られていたが、その後は有能な秘書兼タイピストに育ったらしい。

このように、一方ではチャーチルの支持者は増えていたが、他方では、チェンバレンやハリファックスという旧来からの政敵は同じ閣内にありながら、やはり政敵。そして、外務大臣のハリファックスを中心とした宥和派は今、イタリアのムッソリーニの仲介によってヒトラーとの“和平交渉”に臨むべきだと主張し、閣内では徐々にその意見が強くなっていった。さあ、そんな苦境の中でチャーチルはいかなる決断を・・・？

## ■□■「ダイナモ作戦」はチャーチルの発案？その成否は？■□■

戦争映画の名作は昔からずっと続いているが、2017年は「史上最大の撤退作戦」と呼ばれている「ダンケルクの戦い」に焦点を当てた映画が2本登場した。第1は、『ダンケルク』（17年）（『シネマルーム40』166頁参照）、第2は『人生はシネマティック！』（16年）だ。もっとも、前者はクリストファー・ノーラン監督が「生き抜け！生き残れ！」をテーマとした映画で、『史上最大の作戦』（62年）のような歴史大スペクタクルでもなければ、『太平洋奇跡の作戦 キスカ』（65年）のような歴史秘話ドラマでもなかった。また、後者も「ダンケルクの戦い」の脚本に挑む女性脚本家の活躍に焦点を当てた映画で、「ダンケルクの戦い」そのものを描くものではなかった（『シネマルーム41』未掲載）。

「ダンケルクの戦い」＝「ダイナモ作戦」の全貌とその結果は今ではすっかり明らかにされているが、その今日的評価として、その成功はイギリス側の見事な作戦のためではなく、ドイツ側のミスのおかげとされているのでは・・・？もちろん私はその正確なことは知

らないが、本作ではそれをチャーチルが提案し、一部イギリス将兵の犠牲を覚悟したうえで断行し、成功させたように描かれている。しかし、それってホントにホント・・・？

『ダンケルク』の導入部のシークエンスを観ていると、海岸線に集結した英仏連合軍がドイツの空海軍による攻撃で全滅もしくは降伏させられるのは必至。そう思うてしまうが、現実がそうではなかったのはラッキー。しかし、それはすべてチャーチルの功績なの？私には疑問なしとしないが・・・。

## ■□民意は大切！それをどうやって感じ、汲みとるの？■□

リーダーを直接国民の投票で選ぶ大統領制（＝直接民主主義）の下では、最大のキーワードは民意。日本やイギリスのような議員内閣制（＝間接民主主義）の下でも、やはりリーダーの政策決定においては民意が最大のテーマとなる。日本ではかつて、すべての国民が当たり前のように「天皇陛下万歳！」「欲しがりません、勝つまでは」と叫んでいたが、フランスがナチスドイツに占領され、イギリス本土にまで空襲が及ぼうかという状況下で、イギリス国民の対独戦争への民意は・・・？水戸黄門サマは、自らスケさんとカクさんを連れて日本国内を歩き回り、自分の目で民意を感じ、汲みとろうとしてきた。しかし、複雑な生い立ちながら名門貴族の出身で、幼い頃からエリートコースだけを歩み、階級社会であるイギリスでは完全に“殿上人”であったチャーチルは、どうやって民意を感じ、汲みとるの？

本作後半では、ナチスとの和平交渉もやむなしとするのか否かに悩むチャーチルが、閣議をすっぽかして一人ロンドンの地下鉄に乗り込み、列車の中で国民（＝庶民）と言葉を交わすシークエンスが登場する。ここで生きるのが、辻一弘氏によるチャーチルのメイクアップだ。地下鉄の乗客は、目の前にチャーチル首相が立っていることにビックリ。しかも、チャーチルは彼らに笑顔を向けながら、「ざっくばらんにかきたい。君たちイギリス国民は、いまどんな気持ち？」と語りかけてきたから、さらにビックリだ。現在のように、毎日垂れ流されているテレビ局の取材なら、「チャーチルはバカだ！」「戦争反対！」と言えるかもしれないが、1940年当時、突然目の前に現れた一国の首相からそんな質問を受ければ、「チャーチル賛成」「ナチスには断固屈しない」と答えざるを得ないのは当然だ。

それを聞いたチャーチルは、自分の政策は国民に支持されており、間違っていないと確信し自信を取り戻すわけだが、これって少し単純すぎるのでは・・・？心配していた首相がやっと帰ってきたのはひと安心。その顔は一転して自信に満ち溢れているようだが、それは一体なぜ？そしてそれは、閣議の前に閣外大臣たちを集める中でのチャーチルの演説に集約されていく。すなわち彼は、地下鉄で会話した市井の人びとの名前をあげながら、国民が抱く不安を伝え、「ナチスに屈したら我々はどうなる？得する者もいるだろう。だが、鉤十字がバッキンガム宮殿やウィンザー城にはためくのだぞ！」と、ある意味で反対勢力を脅しつけるかのような力強い言葉が彼の口から発せられることに。

本作が描く、民意の感じ方、その汲みとり方は以上の通りだが、さて、その是非は？

## ■□■人物像は？酒好き、葉巻好き。注目は分筆力と演説力■□■

歴代の各国のリーダーたちがそれぞれ強烈な個性を持っていたのは当然だが、さて本作が描く1940年5月当時のチャーチル人物像は？

本作は辻一弘氏が第90回アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞したことによって、主演男優賞を受賞した俳優ゲイリー・オールドマンの実像とは全く異なるチャーチルの顔や表情が注目されることになった。しかし、本作のパンフレットには、①大森さわこ氏のレビュー「人間味あふれるチャーチル像に結実したオールドマンのキャリア」②木畑洋一氏のコラム「苦悩するチャーチル」③松本正氏のコラム「雄弁家チャーチル」があり、それぞれチャーチルの人物像を解説しているので、これは必読だ。さらに、本作のパンフレットにはチャーチルにまつわるキーワードとして、①酒好き②葉巻③絵描き④Vサイン⑤ノーベル賞受賞文筆家⑥動物好き、が解説されているので、これもしっかり勉強したい。

ちなみに、チャーチルは生涯で500もの絵を描き、ロイヤルアカデミーで16回の展覧会を行っているほどの腕の持ち主で、ルーズベルト大統領に絵を贈ったこともあるそうだが、ヒットラーも元々は画家を志していた青年だった。したがって、政治家としてはチャーチルがヒットラーに勝利したが、もし画家の勝負をさせたらどちらが勝っていたらろうか？

それはともかく、本作に見るこれらのチャーチルの人物像はあくまで彼の一面に過ぎず、彼の政治家としての最大の注目点は分筆力と演説力にあったことは明らかだ。私は弁護士についても「書き弁」と「しゃべり弁」に分類し、ホントは弁護士にはその両者が不可欠だと主張しているが、それは政治家も同じ。政治家には、とりわけ演説力が重要だ。その点については、ひょんなことからヒットラーの能力が卓越していたことは万人が認めていたところだし、チャップリンがヒットラーを演じた(?)『チャップリンの独裁者』(60)では、クライマックスでの演説がものすごい迫力だったが、さてチャーチルの演説力は？本作では、導入部でも中盤でもその1部を見る(聞く?)ことができるが、本作のクライマックスはラストの約4分間に及ぶチャーチルが下院で行った大演説になるので、それに注目！

2018(平成30)年5月9日記